

- (2) 精神疾患をもつ親の子どもへの支援 — フィンランドで開発された親と子ども・家族へのアプローチ —

(看護学科) 上野 里絵

- (3) Therapeutic potential of fingolimod and sphingosine kinases inhibitors in myeloma cells
(フィンゴリモドとスフィンゴシンキナーゼ阻害剤の骨髄腫細胞株に対する抗腫瘍効果)

(血液内科) 田中 裕子

■特別講演

- (1) 乳癌治療の個別化を目指して

講演者 石川 孝 主任教授 (乳腺科学)

座長 三木 保 主任教授 (医療の質・安全管理学)

一般演題: P1-1~20、P2-21~P2-42、P3-43~P3-59

P1-1.

抗菌薬による薬剤熱の臨床的特徴

(社会人大学院博士課程2年微生物学、感染制御部)

○藤田 裕晃、小林 勇仁

(社会人大学院博士課程3年微生物学、感染制御部)

月森 彩加

(感染制御部)

佐藤 昭裕、中村 造、水野 泰孝

(微生物学)

大楠 清文、松本 哲哉

【背景】 抗菌薬による薬剤熱の実態を明らかにし、早期診断に役立てることを目的とした。

【対象と方法】 後方視的に診療録を調査した。2012年9月1日~2015年3月3日までに抗菌薬投与による薬剤熱と診断した21例を対象とした。診断基準は ① 抗菌薬投与中に発生する 37.5°C 以上の発熱で2日間以上持続する。② 他の熱源が否定されている。③ 被疑薬の中止で解熱する。を全て満たすものとした。項目は、抗菌薬の種類、性別、年齢、被疑薬投与期間、被疑薬中止から解熱までの期間、CRP 上昇の有無とした。

【結果】 種類はバンコマイシンが6例 (24%)、アンピシリンスルバクタムが3例 (12%)、シプロフロキサシンが2例 (8%)、クリンダマイシンが2例 (8%)、セフェピムが2例 (8%)、セファゾリンが2

例 (8%)、アンピシリンが2例 (8%)、ST 合剤が1例 (4%)、セフトリアキソンが1例 (4%)、セフォチアムが1例 (4%)、ピクシリンが1例 (4%)、メトロニダゾールが1例 (4%)、アムホテリシン B が1例 (4%) だった。男女比は 10 : 11、平均年齢は 59 歳だった。平均薬剤投与期間は 10.2 日 (1-33 日)、解熱までの平均期間は 1.8 日だった。CRP 上昇をきたしたものは 11 例 (52%) (2.1-32.4 mg/dl) だった。
【考察】 本研究ではバンコマイシンが被疑薬となった率が最も高かった。被偽薬投与期間は 1 日から 33 日と幅があり、リスクとなりうる投与期間を推測することはできなかった。薬剤熱の経過中に測定された CRP の最高値は 32.4 mg/dl であり、薬剤熱によっても CRP 上昇をきたす可能性が考えられた。

P1-2.

Candida 細胞壁 β-glucan 刺激好中球による NETs 形成の検討

(東京薬科大学: 薬学部 免疫学教室)

○石橋 健一、山中 大輔、安達 禎之

大野 尚仁

(八王子: 腎臓内科)

吉田 雅治、尾田 高志、山田 宗治

【目的】 好中球は、真菌感染に対する生体防御反応において、主たる役割を示す細胞の一つである。